



追分沢・南長尾・三枚田遺跡

平成10年度 県営担い手育成基盤整備事業
深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1999. 3

長野県原村教育委員会

おい わけ ざわ みなみ なが お に まい だ せき
追分沢・南長尾・二枚田遺跡

平成10年度 県営担い手育成基盤整備事業
深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1999.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が追分沢・南長尾・二枚田遺跡

序

八ヶ岳山麓に位置する原村では、村の基幹産業である農業の合理化と生産性向上が求められており、これにともなう県営圃場整備事業が大規模に進められております。また当地を含めた八ヶ岳西南麓は遺跡の宝庫・縄文のふるさととして全国的にも著名であり、古くから注目を集めて来ました。

今回報告する、追分沢・南長尾・二枚田の3遺跡は「平成10年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区」内に存在しており、諏訪地方事務所の委託と国・県からの補助金の交付を受けて原村教育委員会が緊急発掘調査を実施したものであります。また、南長尾遺跡は、追分沢遺跡と考査調査を進めましたが、遺跡の立地から見て新遺跡の発見であります。

今回の調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、中新田区及び同地区実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解・ご協力、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表す次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員田中正治郎氏の多大のご助力、そして炎天下でご苦勞された作業員の皆様により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげ、序といたします。

平成11年3月

原村教育委員会
教育長 大 館 宏

例 言

- 1 本報告は「平成10年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村中新田に所在する追分沢遺跡、南長尾遺跡、二枚田遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけ原村教育委員会が、平成10年6月1日から11月20日にかけて実施した。整理作業は、平成11年1月4日から3月24日まで行った。
- 3 現場における記録と写真撮影は田中正治郎・平出一治、遺構の実測は南長尾遺跡は平出・津金喜美子、二枚田遺跡は田中・小林りえが行った。
- 4 執筆は、平出と田中が話し合いのもとに行なった。
- 5 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係資料は、追分沢遺跡は66、南長尾遺跡は100・二枚田遺跡は67の原村遺跡番号をそれぞれ表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、原明芳・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序	
例言	
目次	
I 発掘調査の経過	1
II 位置と環境	4
III 調査方法と土層	5
IV 追分沢遺跡	5
V 南長尾遺跡	7
VI 二枚田遺跡	13
VII 結語	16
追分沢・二枚田遺跡発掘調査団名簿	
報告書抄録	

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

平成6年度から実施されてきた「県営担い手育成基盤整備事業深山地区」も5年目をむかえるが、追分沢・二枚田両遺跡の保護については、平成9年8月22日、10月13日の両日に行なわれた「平成10年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議された。

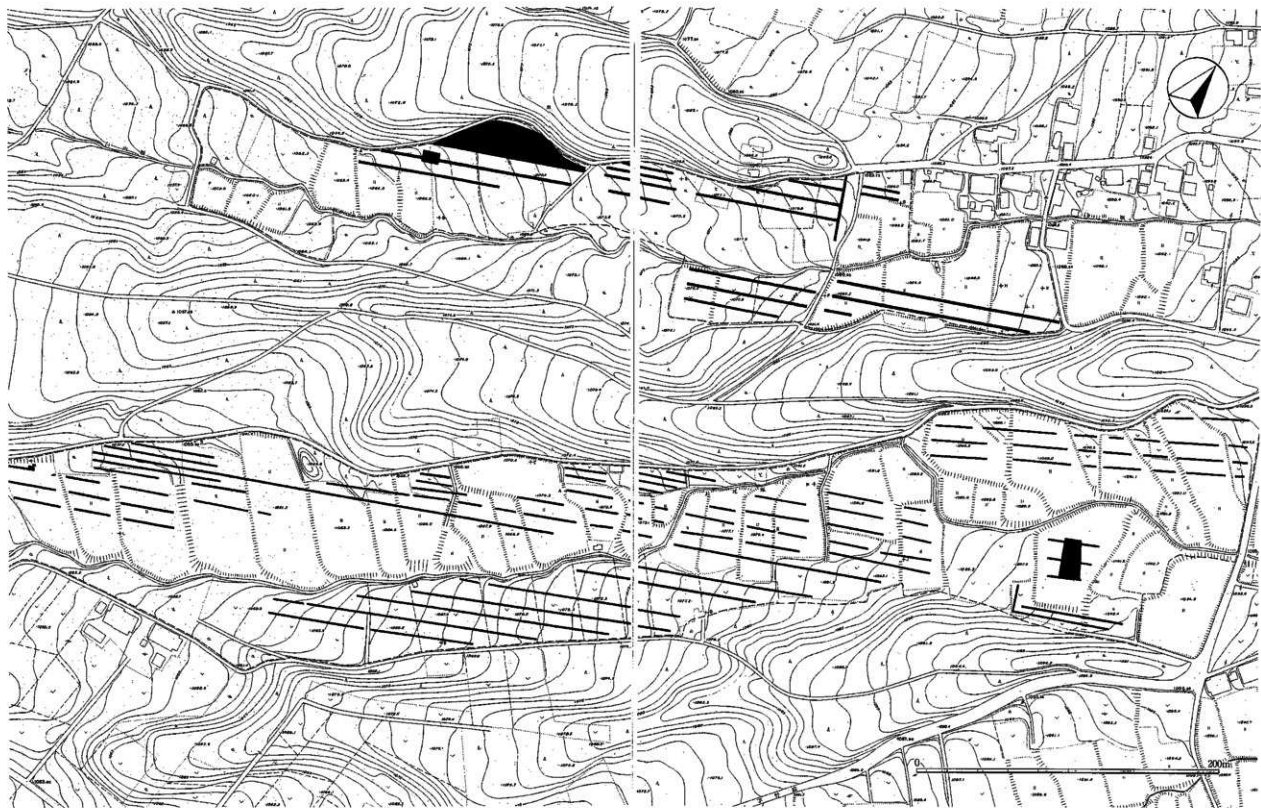
遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、原村の農業の将来を考えると農地の整備は必要なことである上に、農業者から強い要望もあり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き。平成10年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみる事ができた。出席者は長野県教育委員会文化財保護課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者である。

その後も協議を重ね調査日程等の確認を行い、原村教育委員会は、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、国庫および県費から発掘調査補助金交付をうけ、平成10年6月1日から11月20日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2 発掘調査の経過

追分沢遺跡の調査対象地は、基盤整備事業の関係で尾根の南と北に二分されたため、便宜的に南地区と北地区と呼び分けた。また、追分沢遺跡南地区と二枚田遺跡の調査は、基本的に追分沢遺跡、二枚田遺跡の順に進めたが、両遺跡は二枚田川を挟み対峙していたこともあり、調査を円滑に進めるために同時進行した日も多い。

- 平成10年6月1日 発掘準備および基準杭の設定をはじめ。
- 18日 追分沢北地区のトレンチ掘りを重機で行い、トレンチ内の精査を人力ではじめる。
- 30日 トレンチ精査で、住居址と思われる落ち込みを確認する。土師器が伴出したため、便宜的に1号住居址と呼ぶことにする。しかし、遺跡立地からみると、従来考えていた追分沢遺跡とは別遺跡のようである。
- 7月2日 住居址を確認した地点を中心に重機で表土剥ぎをはじめ（後に新遺跡に認定した南長尾遺跡）。
- 6日 遺構の検出作業をはじめ（南長尾遺跡）。
- 15日 住居址・小竪穴の精査をはじめ（南長尾遺跡）。
- 8月3日 全景写真撮影を行い、実測をはじめ（南長尾遺跡）。
- 21日 追分沢遺跡北地区（南長尾遺跡）の調査は終了する。
- 9月8日 追分沢遺跡南地区のトレンチ掘りを重機で行い、トレンチ内の精査を人力ではじめる。



第1图 追分沢・南長尾・二枚田遺跡 発掘調査区域図・地形図(1:2,500)

- 10月8日 二枚田遺跡でトレンチ掘りを重機ではじめる。
 20日 二枚田遺跡で縄文時代中期と弥生時代後期の土器破片が出土する。
 28日 二枚田遺跡の土器出土地点を中心に重機で表土剥ぎをはじめ、引き続き遺構の検出作業をはじめめる。
- 11月13日 追分沢南地区の小竪穴1の精査を行う。機材の撤去をはじめめる。
 16日 追分沢遺跡小竪穴1の実測を行い追分沢南地区の調査は終了する。
 二枚田遺跡小竪穴1・2の精査をはじめめる。
 19日 二枚田遺跡小竪穴1・2の全景写真、実測をはじめめる。
 20日 二枚田遺跡小竪穴1・2の実測、片付けを行い全ての調査を終了する。

II 位置と環境

追分沢・南長尾・二枚田の3遺跡は、長野県諏訪郡原村中新田区の南方外れ、中央自動車道諏訪南インターの東方約3kmにある。

このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した当地方に特有な東西に細長い大小様々の尾根がみられる。それらの尾根上から斜面には縄文時代・平安時代および中世の比較的小規模な遺跡が点在しているが、その多くは「県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区」と「県営担い手育成基盤整備事業深山地区」の工事により、尾根が削られ沢が埋められたことですでに消滅した遺跡が多い。なお、この付近一帯は八ヶ岳西南麓地方においては遺跡の希薄地域である。

追分沢・南長尾・二枚田の3遺跡が立地する尾根は未だ山林が多く、圃場整備事業から取り残されたような状況であったが、沢筋に開かれた水田と普通畑が事業計画地であったことにより、遺跡中心と考えられる尾根上が調査の対象から外れ、各遺跡とも斜面部分の遺跡外縁部が保護の対象である。

追分沢遺跡（原村遺跡番号66）は、八ヶ岳から流下する白山川と二枚田川という2本の小河川によって、北と南を浸蝕された東西に細長い尾根上から斜面に立地している。標高は1072m前後を測り村内においては高所に位置する遺跡である。

長尾遺跡（原村遺跡番号100）は、追分沢遺跡の調査過程で平安時代の住居址を検出したが、白山川を挟み対峙していることから新遺跡の発見であり「南長尾遺跡」と呼ぶことにした。標高は1073m前後を測り村内においては高所に位置する平安時代後期の集落遺跡である。

二枚田遺跡（原村遺跡番号67）は、追分沢遺跡の南対岸に位置し、尾根南方は富士見町地籍となりすでに圃場整備が実施された水田が広がっている。標高は1090m前後を測り村内においては高所に位置する縄文時代中期の集落遺跡である。

調査地点は3遺跡とも斜面から沢にかけての低地であり、極めて似かよった状態であった。地目は尾根際に僅かな普通畑、沢側に水田が開かれていたが、畑地には掘り拳大前後の数多い礫が散乱し地味は良くない。また、地下水が高いためジクジクした箇所もみられた。

新発見となった南長尾遺跡の中心は尾根上と思われるが、山林であり踏査によって遺跡の範囲を明らかにすることは困難なため、ここでは当地方における縄文時代と平安時代の複合遺跡のあり方から、尾根全域に広がるものと考えておきたい。

Ⅲ 調査方法と土層

1 調査方法

追分沢遺跡北地区の調査は、平面直角座標系（国家座標）第Ⅷ系に合わせた追分沢遺跡基準杭 J の値、 $X = -6660$ 、 $Y = -22910$ を基準とし、Y軸に合わせたトレンチを設定し、重機による掘削、引き続き人力でトレンチ内の精査を行った。遺構および遺物を確認した時点で表土剥ぎに切り替え、現れたローム層の上面を人力にて削り遺構の検出につとめた。なお、遺構および遺物出土地点は、白山川の対岸であり追分沢遺跡とは別遺跡であることが考えられるため、南長尾遺跡（原村遺跡番号100）と呼ぶことにした。

追分沢遺跡南地区と二枚田遺跡でも同様に調査を進めたが、両遺跡は二枚田川をはさみ対峙していることから、同じ基準杭を使用したのが、便宜的に二枚田遺跡基準杭と呼ぶこととした。したがって追分沢遺跡南地区と二枚田遺跡の調査は、二枚田遺跡基準杭 A の値、 $X = -6930$ 、 $Y = -23070$ を基準としている。

2 土層

遺構の実測等は、国家座標に従った測量基準杭を打設して行った。

土層は、尾根の南斜面、北斜面の違いはあるが、基本的には似かよった層序である。いずれの調査地点も水田造成の切り盛りによる攪乱が著しく、耕作土の直下が削平されたロームないしは砂礫を多量に含む黄褐色土となる範囲は広い。また、二枚田川と白山川の氾濫がみられ土層は不安定である。基本的な層序は次のとおりである。

- | | |
|-----------|---|
| I 層 黒褐色土 | 耕作土。基本的にはII層が耕作により淡色化したものと思われるが、握拳大からそれよりも小さい礫を数多く包含している。 |
| II 層 黒色土 | I層より黒味が増し、やはり数多い礫を包含している。堆積が厚いところで真黒色土が認められたが、その範囲は僅かである。 |
| III 層 褐色土 | 漸移層。 |
| IV 層 黄褐色土 | 数多い砂礫を含む黄褐色土。尾根際ではローム層が認められた。 |

Ⅳ 追分沢遺跡

1 発見した遺構

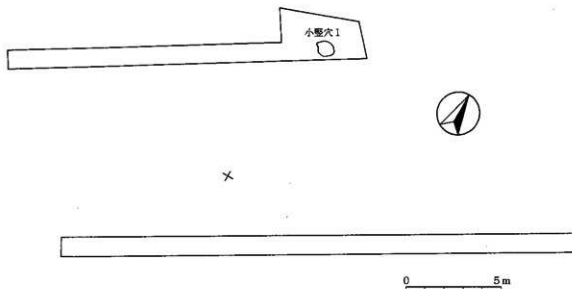
発掘調査は、第1図に示したようにY軸に合わせたトレンチを設定して行ったが、遺跡の中心と考えられる尾根上の山林が調査の対象から外れていたこともあり、調査地区が尾根の南と北に2分されたため、便宜的に「南地区」と「北地区」とに呼び分け、北地区から調査をはじめた。

調査の結果、北地区では遺構・遺物を発見するまでには至らなかった。南地区では遺物を発見するまでには至らなかったが、時代不詳の小竪穴1基を検出した。

小竪穴1（第1～3図）

ローム層に掘りこまれた小竪穴で、平面形は98.0×83.0cmの不整楕円形を呈し、埋土は黒色土の単層で自然埋没と考えられるものである。埋土中には数個の礫がみられたが性格は不明である。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はやや丸く深さは26.0cmを計る。

遺物は皆無で、帰属時期および性格などは不明である。

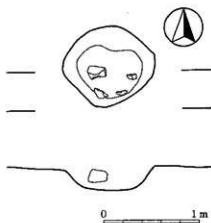


第2図 追分沢遺跡 遺構位置図（1：200）

2 まとめ

昭和54年度に長野県教育委員会で実施した「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」の折に、縄文時代中期土器破片、平安時代の土師器と須恵器の破片採集地点が、調査範囲に含まれていたことから遺構の検出を期待した。しかし、時代不詳の小竪穴1基を発見しただけである。

本調査では、遺物を発見するまでには至らず、遺跡の範囲および性格を明らかにすることはできなかった。



第3図 追分沢遺跡 小竪穴実測図（1：40）

V 南長尾遺跡

1 発見した遺構と遺物

重機によるトレンチ掘り、引き続き行ったトレンチ内の精査で、平安時代の土師器坏破片が出土し、住居址と考えられる落ち込みが認められたため、面的調査をすすめたがその範囲は、トレンチ掘りの成果と地形を考慮するなかで決定した。

調査では、縄文時代中期の小竪穴1基、平安時代後期の竪穴住居址3軒、時代不詳の小竪穴1基を検出した。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

小竪穴1（第4・5図）

ローム層に掘りこまれた小竪穴で、埋土は褐色土の単層であるが自然埋没と考えられる。平面形は150.0×140.0cmの不整円形を呈し、底面は舟底状で壁の立ち上がりはなだらかで、深さは58.0cmを計る。

出土した遺物は、磨滅が著しく図示することはできなかったが、縄文時代中期末葉の土器破片1点である。磨滅した土器破片1点の出土であり帰属時期を明らかにすることはできないが、ここでは縄文時代と考えておきたい。性格についても不明である。

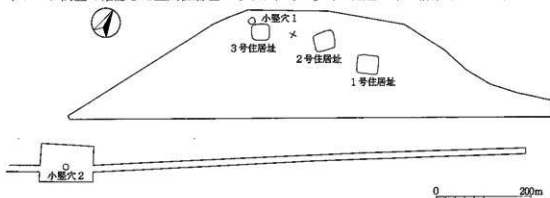
遺構外出土の遺物（第6図）

遺構外から出土した遺物は土器と石器がある。土器は破片10数点が出土しただけで、第6図1は中期初頭、2～5は中期末葉である。石器は黒曜石の剥片1である。

(2) 平安時代の遺構と遺物

第1号竪穴住居址（第1・4～6図、写真2・3）

トレンチ調査で確認した竪穴住居址であるが、その多くは黒色土中に構築されており、トレン



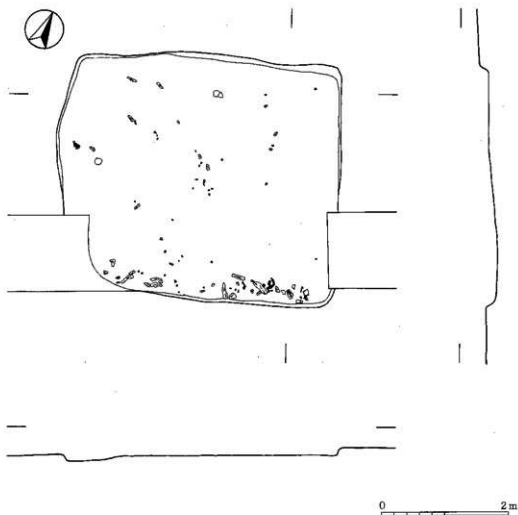
第4図 南長尾遺跡 遺構位置図（1：800）

チによる破壊がある。平面プランを検出するまでに時間がかかり、結果的には繰り返し埋土を削りってしまったことになり不明瞭な点の方が多いが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が見られるものであり自然埋没と思われる。炭化材が放射状に遺存する傾向が見受けられるうえに、広範囲におよぶ薄い焼土がみられた。炭化材はいずれも細いものばかりであるが、柱や垂木材の一部と思われるものであり焼失住居であろう。

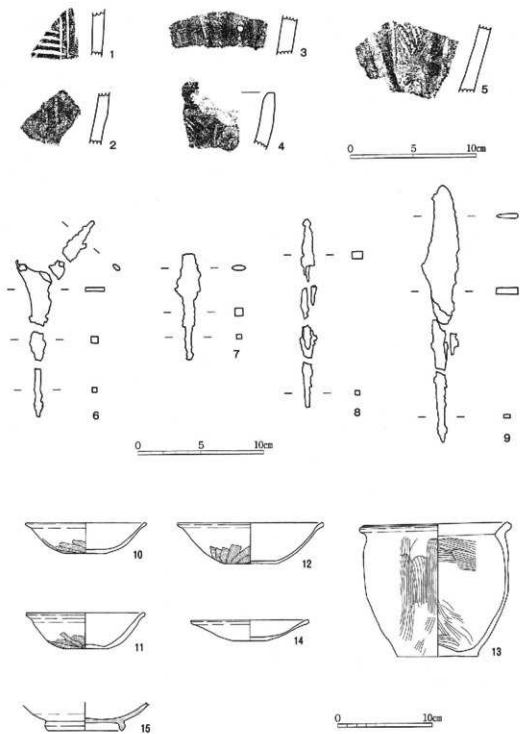
竪穴の大きさは東西450.0cm、南北395.0cmを計る。壁の立ち上がりはやや不明瞭である。壁高は東が9.0cm、西は4.0cm、南は8.0cm、北は14.0cmと低い。床面を明確にできる状態ではなく、焼土の有る無しを目安に精査を進めたが、やや南に傾き地山の礫が露出した箇所があり床面は現状よりやや上方にあったものと思われる。

カマドは、東壁に石組粘土カマドが構築されていたが、重機で掘削したトレンチ掘りの折、平板石数点を取り上げてしまい原形をとどめていない。火床の焼土は厚く11cmを計り、その下層も火熱による変色がみられた。

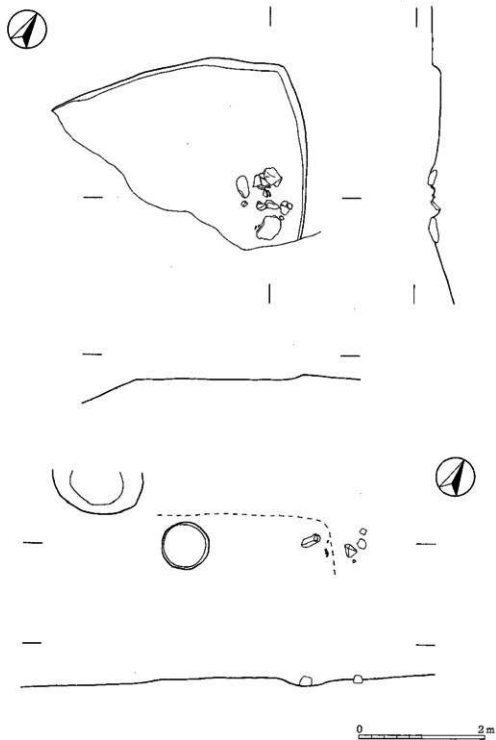
遺物は、土師器・灰釉陶器と鉄製品がある。



第5図 南長尾遺跡 第1号竪穴住居址実測図 (1:60)



第6圖 南長尾遺跡土器拓影・鉄製品・土器実測図 1~9 (1:3)、10~14 (1:4)



第7图 南长尾遗址 第2·3号整穴住居址实测图 (1:60)

土師器は、第6図10～12の坏3点を図示したがヘラ削りが施されている。13の甕は底部が木葉底で胎土・焼成とも普通である。図示できなかった数個体の小破片がある。

灰釉陶器は、図示できなかった数個体の小破片である。

鉄製品は、第6図6～9の鉄鏃4点であるがいずれも腐食が進んでいる。9は断面の状態から鉄鏃としたが刀子であるかもしれない。

第2号竪穴住居址（第1・6・7図、写真4）

1号住居址の西方で検出した、隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、その多くは黒土層中に構築されていたこともあり、南と東側はすでに流失していた。埋土中には多量の焼土が認められ、その焼土の広がりによってプランを確定した。埋土は薄く詳しいことはわからないが自然埋没と考えられるものである。

竪穴の大きさは東西(400.0)cm、南北(310.0)cmを計る。壁の立ち上がりは悪いうえに、東壁と北壁がわずかに残存してただけである。その高さは高い東壁で8.0cm、北壁で9.0cmを計る。床面は部分的にはタタキ床も認められはしたが、やや南に傾斜し総体的には良くない。竈は東壁に石組粘土竈が構築されていたものと思われるが、袖石が残存しただけであり、近くに竈石と思われる石が散在していた。竈内から土師器の破片が出土している。火床の焼土の厚さは4.0cm程を計り、その下層も火熱による変色が認められた。

遺物は少ないが、土師器と灰釉陶器の破片がある。

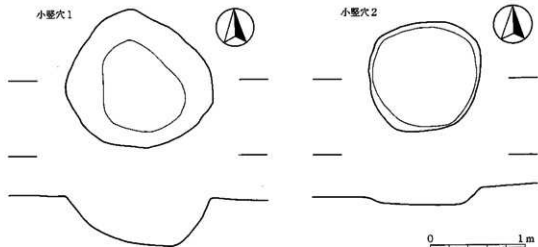
土師器は、第6図14の坏1点を図示したが、図示できなかった数個体の小破片がある。

灰釉陶器は、図示できなかった数個体の小破片である。

第3号竪穴住居址（第1・4・7図）

1号・2号住居址の西方で検出したが、黒土層中に構築されていたこともあり、すでに自然流失した箇所が多いうえに、耕作の畝が床面に達するなど最悪の状態であった。竈の火床と北側のわずかな範囲で認められたタタキ床から住居址を確認したが、詳しいことは一切不明である。

平面プランは隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、検出した時点ですでに床面が出てし



第8図 南長尾遺跡 小竪穴1・2実測図(1:40)

まい埋土がない状態であったが、検出作業の折に認められた焼土混じりの褐色土が埋土と思われる。大きさは東西(320.0)cm、南北(110.0)cmを計る。壁の立ち上がりは認められなかった。床面は部分的にタタキ床も認められはしたが極めて悪い。竈は北東隅に石組粘土竈が構築されていたと思われるが、袖石1点が残存しただけですでに破壊されていた。なお、近くに竈石と思われる数個の石が散乱していた。火床の焼土の厚さは6.0cm程を計り、その下も火熱による変色が認められた。

遺物は、土師器の小破片が僅かにあるが図示できるものではない。

(3) 時代不詳の遺構

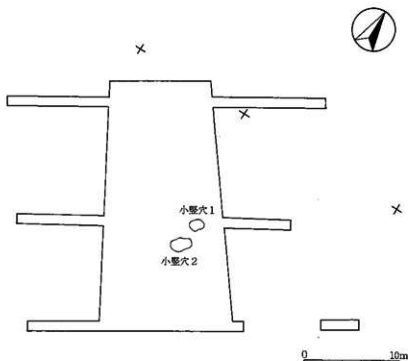
小竪穴2(第1・4・8図)

黒色土層に掘りこまれた小竪穴で、埋土は微細な炭化物の混じる真黒色土の単層であるが自然埋没と考えられる。平面形は128.0×116.0cmの不整形円形を呈するタライ状で、底面は平らで壁の立ち上がり比較的良好、深さは19cmを計る。

遺物の発見は皆無で、帰属時期および性格などは一切不明である。

2 まとめ

当地方において平安時代の集落が営まれる典型的な日溜り地形であるが、その規模は小さく、



第9図 二枚田遺跡 遺構位置図(1:400)

3軒の住居址を発見したにすぎない。今までは、このような小規模な日溜り地形に眼を向けることがなかったため、今回の発見意義は大きいと思う。平安時代における集落研究上の好資料になることは間違いないし、今後の開発における遺跡保護に役立つものとなろう。また、縄文時代は、僅かな遺物ではあるがその出土状態からみて、尾根上に住居址が埋没していることを容易に考えられる状況であった。

VI 二枚田遺跡

1 発見した遺構と遺物

調査の対象は北斜面であり「1. 位置と環境」で述べた、昭和59年に有頭石棒をはじめ縄文土器破片と石器が出土したといわれている地点が発掘調査の対象に含まれていたこともあり、配石遺構の検出を期待したが、その地点を特定することはできなかった。

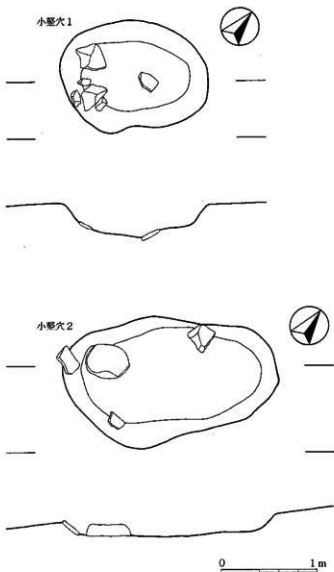
緩やかに傾斜するテラス状のやや小高い個所で、時代不詳の小竪穴2基を検出した。本調査区域の中では最も東寄りに位置しており、そこは遺跡の東北外縁部にあたる。

(1) 縄文時代の遺物

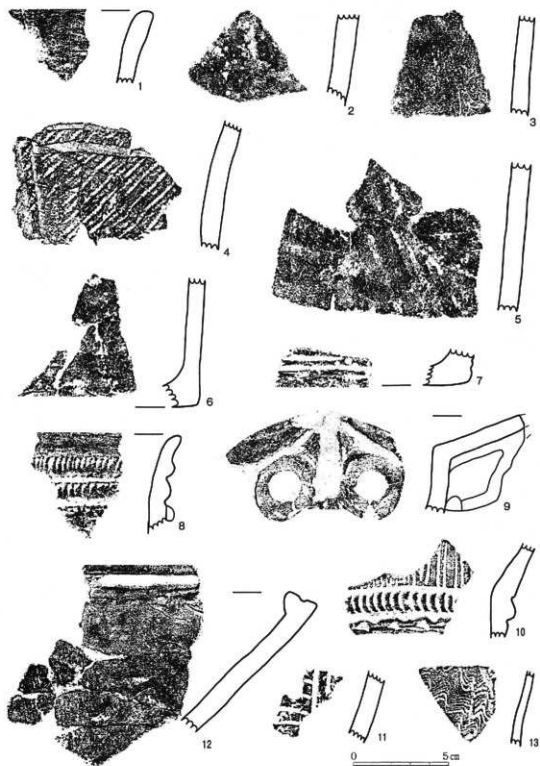
遺構外出土の遺物

(第11図)

本調査区域東寄りの尾根際から縄文時代中期の土器破片と黒曜石剥片が出土したが、集中することはなく北斜面から落ちてきたような状態であった。当地方における縄文時代中期の集落址では尾根北斜面をごみ捨て場利用され



第10図 二枚田遺跡 小竪穴実測図 (1:40)



第11圖 二枚田遺跡 遺構外出土土器拓影(1:2)

ることがしばしばあり、出土遺物は北斜面に遺棄されたものの一部が落下してきたのであろう。土器は、第11図1～12の12点を図示したが、破片ばかりで中期初頭から中葉である。石器は、図示できなかったが黒曜石剥片3点である。

(2) 弥生時代の遺物

遺構外出土の遺物 (第11図)

小堅穴の検出地点で土器破片1点が出土したが、小堅穴との関係は不明である。土器は、第11図13の甕破片で後期と思われる。

(3) 時代不詳の遺構

小堅穴1 (第1・9・10図、写真5)

砂礫を多量に含む黄褐色土層に掘りこまれた小堅穴で、平面形は159.0×115.0cmの楕円形を呈し、埋土は砂礫混じりの黒色土の単層で、炭化物は認められない。壁の立ち上がりはなだらかで、底面は丸くなり深さは35.0cmを計る。

遺物の出土は皆無で、帰属時期および性格などは一切不明である。

小堅穴2 (第1・9・10図、写真6)

砂礫を多量に含む黄褐色土層に掘りこまれた小堅穴で、平面形は225.0×138.0cmの楕円形を呈し、埋土は砂礫混じりの黒色土の単層で、炭化物は認められない。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はほぼ平らで深さは25.0cmを計る。

遺物の出土は皆無で、帰属時期および性格などは一切不明である。

2 まとめ

昭和46年に長野県教育委員会が実施した「農業振興地域等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査」の報告書に「道路拡幅のため削ったところ住居址が露呈した。縄文中期の土器片が出土している」とみえることから、尾根上に縄文時代中期の集落址の埋没は容易に考えられることであり、本調査で出土した遺物は少なかったが、北斜面から落下してきたものと思われる。

時代不詳の小堅穴2基を検出したが、形態と主軸(長軸)方向はほぼ同様で、2者は何らかの関係があるものと思われるが、伴出遺物はなく性格は不明である。近くから弥生時代後期の土器破片1点が出土した、小堅穴との関係をあきらかにすることはできなかったが、八ヶ岳西麓地方において弥生時代後期の土器破片の出土は初めてのことであり、画期的な発見であったといえよう。

Ⅶ 結 語

追分沢・南長尾・二枚田の3遺跡の発掘調査を実施したが、3遺跡とも遺跡の中心と思われる尾根上が対象から外れていたこともあり、発見した遺構はそれほど多くなかった。遺跡を保護する立場では良かったと思っている。しかし、調査の対象が低地部という限界があり、遺跡の範囲を明確にできなかったことは残念である。

南長尾遺跡は、今までに目を向けることのなかった小規模な日溜り地形において、平安時代の集落址を検出した意義は大きい。やはり平成10年度に調査を実施した中尾根頭遺跡も同様の小規模な日溜り地形であり、今後の開発における遺跡保護に役立つ発見であったと思う。

二枚田遺跡からは、1点とはいえ弥生時代後期の土器破片が出土した。弥生時代の遺跡は無いといわれてきた原村においては貴重な発見であった。

3遺跡とも遺跡の中心部を外れていたこともあり出土した資料は少ないが、今後の遺跡保護を考えるうえで意義ある調査であったと思っている。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

引用参考文献

- 198003 長野県教育委員会『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 198507 原村役場『原村誌 上巻』

写真 1

南長尾遺跡

調査地点遠景

(重機によるトレンチ掘り)



写真 2

南長尾遺跡

第1号竪穴住居址



写真 3

南長尾遺跡

鉄製品出土状態

第1号竪穴住居址

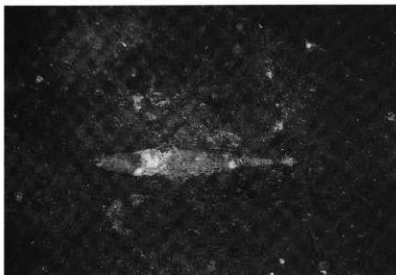




写真4
南長尾遺跡
第2号竪穴住居址



写真5
二枚田遺跡
小竪穴1



写真6
二枚田遺跡
小竪穴2

報告書抄録

ふりがな		おいわけざわ・みなみながお・にまいだいせき						
書名		追分沢・南長尾・二枚田遺跡						
副書名		平成10年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		原村の埋蔵文化財						
シリーズ番号		50						
編著者名		平出一治 田中正治郎						
編集機関		原村教育委員会						
所在地		〒391-0192 長野県諏訪郡原村6549番地1 Ⅱ 0266-79-7930						
発行年月日		西暦 1999年03月						
所収遺跡	所在地	コード		北緯 度分	東経 度分	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
追分沢	長野県諏訪郡 原村中新田	3637	66	35度 56分 14秒	138度 14分 40秒		3,136.9	平成10年度県営担 い手育成盤整備事 業深山地区
南長尾	長野県諏訪郡 原村中新田	3637	100	35度 56分 19秒	138度 14分 32秒	19980601 ? 19981119	2,428.7	
二枚田	長野県諏訪郡 原村中新田	3637	67	35度 56分 20秒	138度 14分 50秒		2,541.0	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
追分沢	集落跡	時代不詳	小堅穴	1基	縄文時代 中期土器破片・石器 平安時代 土師器・灰胎陶器・ 須恵器・鉄製品		日だまり地形に営まれた 平安時代後期の小集落跡 の調査であり、集落研究 の好資料となろう。	
南長尾		縄文時代	中期	1基				
		平安時代	後期	3軒				
		時期不詳	竪穴住居址	1基				
二枚田	包蔵地	縄文時代 弥生時代			縄文時代 中期土器破片 弥生時代 後期土器破片		八ヶ岳西麓で発見例が軀 めて少ない弥生土器破片 の発見は1点であるが特 記できよう。	

追分沢・二枚田遺跡発掘調査団名簿

団長	大館 宏（原村教育委員会教育長）						
調査担当者	平出 一治						
調査員	田中正治郎						
調査参加者	発掘作業	田中 初一	清水 正進	小池 英男	小島 政雄		
		小松 弘	清水 太助	西沢 寛人	金子 正美		
		久根 種則	小林 りえ	日達今朝江		五味八代江	
		林 史子	小林 ミサ	五味 元		津金喜美子	
		進藤 郁代	吉川 幸子	（順不同）			
	整理作業	清水 正進	小林 りえ	津金喜美子	進藤 郁代		
		（順不同）					

事務局 原村教育委員会 小林 鏑晃（教育次長） 津金 一臣（庶務係長）
戸田 美鈴 平出 一治（文化財係長） 中村 恵子
田中正治郎（県派遣主事）

原村の埋蔵文化財50

追分沢・南長尾・二枚田遺跡

平成10年度 県営担い手育成基盤整備事業
業深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成11年 3月

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷 もえぎ企画書籍
岡谷市御倉町 2-21

